「泣きたい時は……」

登場人物

関屋　茜
高梨　了

NA　泣きたい時は……。

（誰もいない図書館の閲覧室の一角。テーブルに頬杖を突いて窓越しの夕焼けを眺めている茜）

茜　はあ……（大きなため息）

間

茜　あーあ、どうしたらいいんだろ、私。
了　何悩んでんだよ茜
茜　了ちゃん！？　フフ、バカみたい。いるわけないじゃない、こんなところに……
了　バカじゃないよ、茜は。
茜　いいの、バカで。
了　聞いてやろうか？　何があった？
茜　別に。
了　ウソツキ。バレバレなんだよ。
茜　ほっといてよ。
了　本当に？
茜　……変わんないね。お節介なトコ。
了　まあな。百も承知。
茜　何それ？　死語よ、死語！
了　相変わらず手厳しいな。オトコか？
茜　そんなんじゃない。
了　だろうな。
茜　言うじゃない。
了　お互い様だ。
茜　……うまくいかないの。
了　何が？
茜　何もかも。教授の講義を手伝ってても、バイトしててもすぐ上の空になってミスばっかり。
ダイスケは家出しちゃって帰ってこないし。

了　ダイスケ？
茜　あ、ネコ。部屋で飼ってるネコ。可愛いんだよ？
了　あ、そう。
茜　興味ない？
了　男と同棲でもしてたのかと……。
茜　だからオトコは関係ないって言ったでしょ！
了　そうだったな。
茜　まあ、あいつにはよくあることだから心配してるわけじゃないけど……
了　けど？
茜　部屋に帰っても疲れた心を癒してくれる存在がいないのは、ちょっと淋しいな、って。
了　なんだ、しおらしい事言うじゃん。
茜　ひどーい。私だって女のコなんだから。
了　知ってるよ。
茜　さらっと返さないでくれる？　空気読め。
了　本当のことだもん。ガキの頃から何年の付き合いだと思ってるんだ。
茜　１５年。２年前でだけど。
了　そんな顔するなよ。俺だって好きでお前から離れたわけじゃないんだから。
茜　そうかもしれないけど。
了　しれないんじゃなくて本当にそうなんだよ。
茜　はいはい、分かった分かった。

間

茜　もう終わり？
了　え？
茜　慰めに来たんじゃないの？
了　んー、まあそうなんだけどさ。忘れてたんだよ。
茜　何を？
了　自分が口下手なんだって事。
茜　フフ、フフフ、あはははは！
了　わ、笑うなよぉ。
茜　だ、だって、はは、ははは！　おかしい。ふふ、うっ、ううっ（笑いはいつしか涙に代わる）
了　昔からそうだったよな、茜は。強がってさ、何があっても平気！　なんて顔しててさ。でも、俺は分かってた。無理してるんだって。
茜　了……ちゃん……
了　泣きたい時は泣いていいんだ。我慢しなくてもいいんだ。
茜　わたし……わたし……。

了　うん。

茜　やっぱりダメなの、わたし。さっき了ちゃんが言ったとおりの性格だから、大したことが出来るわけじゃないくせに、無理に頑張ってみんなの役に立とうとして、空回りして、結局上手くいかなくて、みんなから距離をとられるようになって。この先、どうしたらいいのか。

間

茜　了ちゃん、お願い。帰ってきて。

了　茜。悪いけど、帰れないんだ、もう。

茜　分かってる、分かってるけど、わたし、了ちゃんがいないと、もう。

了　ごめん。

茜　了ちゃん。

了　茜？　お前の気持ちは分かるし、俺も何とかしてあげたいとは思う。俺を頼ってくれるのも嬉しい。けど、いつまでも俺に甘えてちゃダメだ。お前はまだ生きているんだ！　生きているなら、生きているなりのやりかたがあるはずだ。勇気を持つんだ。勇気があれば、結果はついてくる。

茜　勇気……。

了　もし今までの自分の行動を勇気だと思っているなら、それは違う、分かるよな？

茜　うん。

了　それなら、これからどうすればいいのか、それも自ずと見えてくるはずだ。

茜　うん。

了　じゃあ、俺、行くから。

茜　待って！　まだ言いたいことが……！

了　もう会えないけど、ずっと見守ってるよ、茜。

茜　お願い！　待って！

ＳＥ：ベルが鳴る（音楽に変更するかも？）

茜　あ……。や、やだ、夢見て泣いてたんだ、わたし。

茜（モノ）何の夢だったんだろう？　誰かに勇気を持てって言われたような気がしたんだけど。それしか覚えてない。でも……勇気か。

了　お前なら大丈夫だよ、きっと。

了